第２章　調査に至る経緯と概要

第１節　調査に至る経緯と経過

１．調査に至る経緯

2010年度に岡山大学鹿田キャンパスに「地域医療人育成センターおかやま」の新営が計画された。建設予定地はキャンパス北東部の駐車場であり、以前は旧管理棟の建物があった地点である。周辺では鹿田遺跡第１次（外来診療棟）[1]・第16次（立体駐車場）[2]・第19次（歯学部渡り廊下）[3]等の発掘調査が実施されている。それらの成果を受け、旧地形および弥生時代以降の遺構・遺物の広がりを確認するため同年度に試掘・確認調査を実施した[4]。その結果、弥生時代～近世の遺構が確認されたことから、予定地に対し発掘調査を実施することとなった。

調査面積は533㎡で、調査員３名が担当した。

２．調査の体制

調査主体　岡山大学　学長　森田　潔

調査担当　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　センター長　北尾　善信
副センター長　新納　泉

調査研究員　教授　山本　悦世
助教　岩﨑　志保（調査主任）
助教　南　健太郎

運営委員会　調査年度

＜委員＞

北尾　善信　財務・施設担当理事（センター長）
新納　泉　大学院社会文化科学研究科教授（副センター長）
久野　修義　大学院社会文化科学研究科教授
柴田　次夫　大学院自然科学研究科教授
大塚　愛二　大学院医歯薬学総合研究科教授
沖　陽子　大学院環境学研究科教授（調査研究専門委員）
山本　悦世　埋蔵文化財調査研究センター教授（調査研究室長）
秋山　明寛　施設企画部長

埋蔵文化財調査委員会　報告書刊行年度

＜委員＞

松本　直子　文明動態学研究所所長
清家　章　学術研究院社会文化科学学域（文）教授（文化遺産マネジメント部門長）
今津　勝紀　文明動態学研究所教授
大橋　俊孝　学術研究院医歯薬学学域（医）教授
中嶋　佳貴　学術研究院環境生命科学学域（農）准教授
野坂　俊夫　学術研究院自然科学学域（理）准教授
岩﨑　志保　文明動態学研究所准教授（文化遺産マネジメント部門チームリーダー）
渡邉　恭令　施設企画部長

３．調査経過

2011年６月15日～７月13日に造成土掘削を実施した。掘削を始めてすぐに、旧管理棟基礎が前面に残っており、強固なコンクリート構造であることが判明した。遺跡の保護を第一に考慮し、まず基礎のない部分（190㎡）の発

掘調査を実施した後、コンクリート基礎を除去し、残りの調査を実施することとした（図３）。

前期調査は７月14日に開始した。調査は長方形の区画５つをそれぞれ掘り下げていくこととなった。表土直下で石組や水路が検出され、水路を伴う池状遺構が確認された。調査区が分断されていることから接続関係の把握が困難であった。石組等の記録のため、調査員を１名増員し、終了後、続いて近世～弥生時代の調査を進めた。近世の井戸・土坑、中世の井戸、弥生時代の井戸・土坑・溝・土器集中等を確認し、９月22日に前期の調査を終了した。

続いて９月26日～10月７日に基礎を撤去し、10月14日から後期調査を開始した。前期調査との接続部及び遺構関係に留意しつつ、近代の池状遺構、近世の井戸・土坑・溝と調査を進め、弥生時代後期の遺構の調査を実施した。11月18日にすべての調査を完了した。

前期調査中の８月21日に現地見学会を実施した。雨天であったが、26名の参加者を得た。この時に調査地点にかつて居住していた住民の情報を得ることができた。後期調査においても11月５日に現地見学会を計画し、広報をおこなったが、当日降雨によりやむなく中止した。

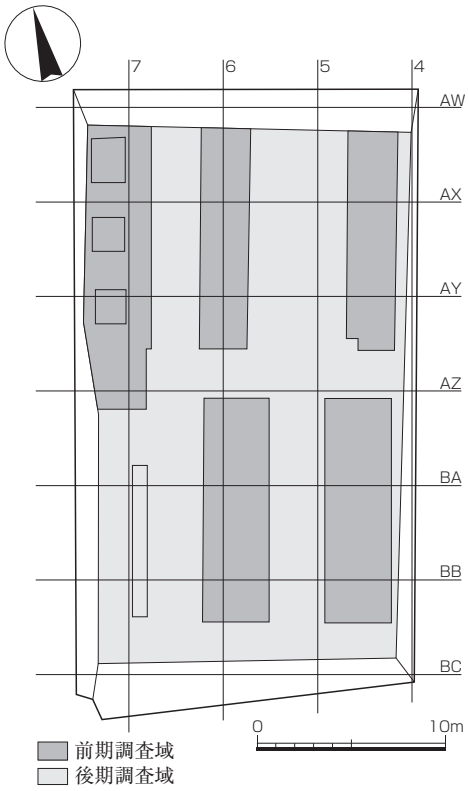

図３　調査開始状況（縮尺1/400）

第２節　調査の概要

本調査においては、弥生時代後期～古墳時代初頭、中世、近世、近代の遺構が確認された（図４）。

弥生時代後期～古墳時代初頭

井戸３基、土坑６基、溝５条、土器集中３カ所を検出した。本時期の調査地点付近の地形は南半が微高地を呈し、北側が低位部にあたる。検出した遺構は本地点の中央部～南半に位置するもので、微高地上に井戸３基と土坑４基、溝２条が、微高地部と低位部の境界に溝３条と土器集中が、そして低位部南端に土坑２基が確認された。

微高地上の遺構は後世の影響を大きく受けており、特に土坑・溝については全形並びにその機能を推測することが難しい。３基の井戸は調査区内でも南端に位置し、居住域はさらに南側に広がる可能性が高い。いずれも弥生時代後期に属する。土坑および土器集中から出土する遺物は、同じく弥生時代後期を主体とするが、一部の土坑に古墳時代初頭に入るものが少数認められる。また北半の低位部は弥生時代後期後半までに土砂の堆積が進み、弥生時代後期のうちに南半の微高地部との比高差が解消しつつある状況が窺える。

中世

井戸３基を検出した。中世前半に比定される２基は調査区南端に、中世後半の１基は調査区北部に位置する。前者の井戸のうち西側の１基は出土遺物から古代の可能性も残すが、本地点全体や本遺構周辺の古代の遺物はかなり少ない。中世前半においても、鹿田キャンパス全域で屋敷地が配置される時期であるが、本地点では南端に井戸が確認されるのみであり、居住域は本地点より南側に展開するのであろう。一方、中世後半の井戸１基が北部に確認され、後述するように近世の遺構・遺物のありかたから、中世後半以降、本地点全域が居住域として利

用されることが窺える。

近世

井戸８基、土坑４基、溝１条を検出した。井戸は調査区北東部に３基､北西部に２基、南西部に４基確認された。土坑と溝は南東部に位置しており、遺物が少なく詳細な時期の判断が難しいが、こうした分布は屋敷地のまとまりを示す可能性も考えられる。

近代

井戸１基、庭園遺構２基、溝１条を検出した。井戸は調査区北東部に、庭園遺構は北端と南半に位置する。溝１条は後述するが庭園遺構に関連する。井戸１基については遺物がなく、庭園遺構との前後関係あるいは同時性について不明である。

庭園遺構はいずれも、調査区外の東側を南流する枝川からの取水路と池からなり、南半の庭園遺構１には排水路も取りつく構造である。池部と水路には石組護岸を主体的に取り入れ、一部では板柵護岸を有する。出土遺物から明治～大正時代に機能し、岡山医学専門学校設置の際に埋没したものである。これら２基の庭園遺構は異なる２軒の居住区画にあたる。

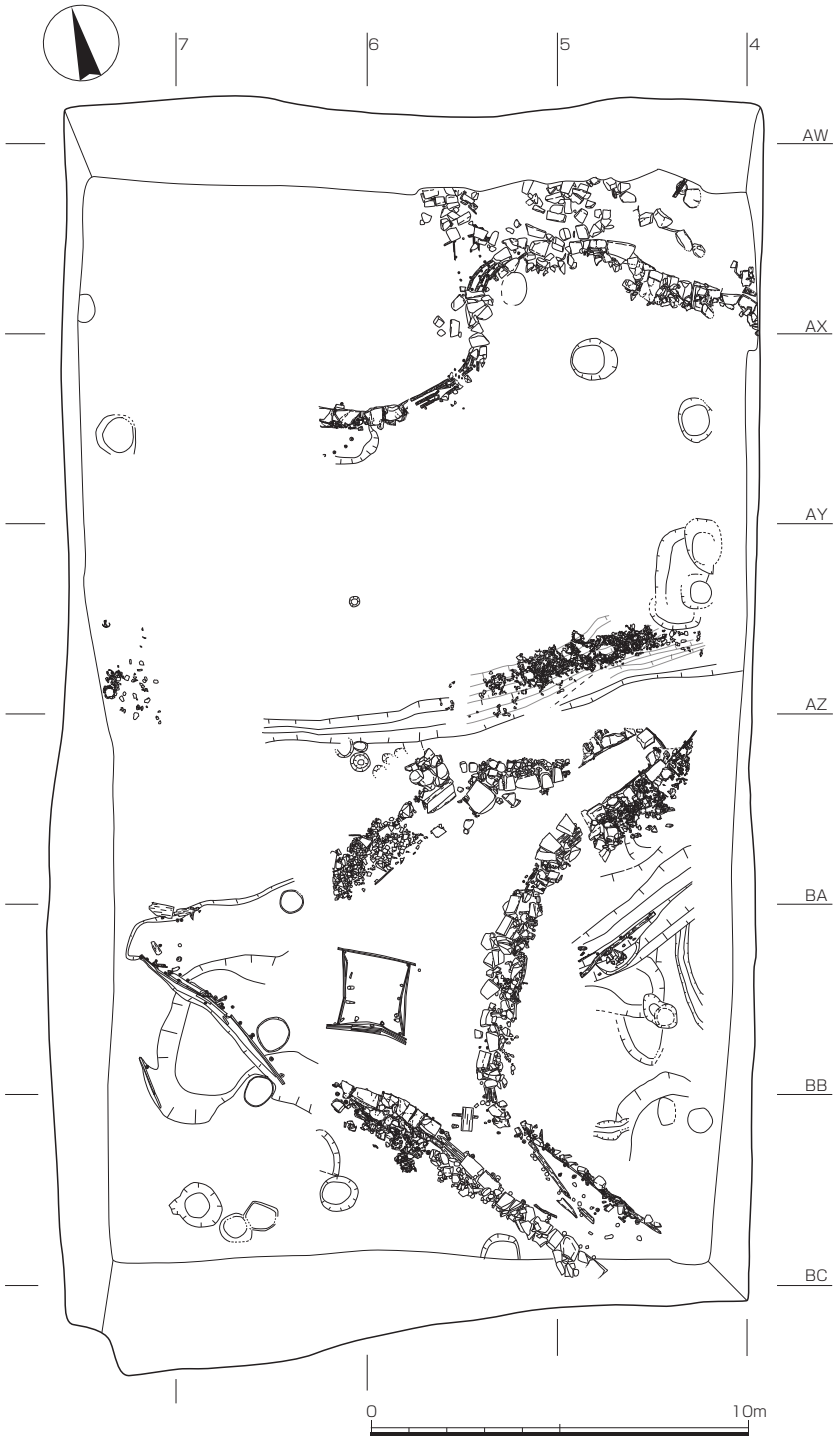

図４　検出遺構全体図（縮尺1/500）

註

(1) 吉留秀敏・山本悦世編　1988『鹿田遺跡Ⅰ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第３冊
(2) 高田貫太　2006「鹿田遺跡第16次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2004』
(3) 野﨑貴博　2010「鹿田遺跡第19次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2008』
(4) 野﨑貴博　2012「岡山県地域医療総合支援センター予定地」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2010』